

在日コリアン多住地域としての荒川区日暮里・三河島 ——ひとつの地域誌としての試み——

浅野 順

東京都荒川区の日暮里・三河島地域は、戦前戦後を通して在日コリアンの多住する地域である。本研究は、この地域の地域誌を構成することにより、多住地域が今まで保たれている要因、在日コリアン住民と日本人住民との関係、地域の「在日コリアン」社会の変化を、その地域的特性を踏まえたうえで考察することを目的としている。調査内容は、地域の形成史、朝鮮人労働者流入過程と居住形態、在日コリアン住民と日本人住民の関係、在日コリアン定住の基礎となった済州島のネットワーク、個人のアイデンティティである。

この地域に済州島出身者だけでなく、多くの朝鮮人労働者が集まった背景には、東京市の発展に伴う、周辺部への施設や雇用の移転・分散の場としての役割を果たした日暮里・三河島地域の特質がある。

地域の形成過程に関しては、朝鮮人労働者の集住に関して強制的な力や権力は働いていない。日本人によるこの地域への居住と、朝鮮人労働者の居住の時期には、大きな差が見られず、居住形態は日本人との混住である。このような歴史的特徴は、在日コリアンによって自らの存在をアピールする機会が見られなかった理由のひとつをなしていると考えられる。

さらに、戦前・戦後を通して「在日コリアン」人口が保たれた理由には、済州島出身者による地域の再生産が最も大きな役割を果たしている。戦前からの1世は、労働のつてを紹介すること、または靴産業に代表されるような、労働力を必要とする雇用を生み出すことによって、故郷から労働者を呼び込んだ。また、済州島という同郷どうし

の結婚にこだわらざるを得ない制約から、故郷からの呼び寄せという形で配偶者を引き込み、家族の再生産が行われていった。2世、3世になると、済州島との実利的な関係は薄れていく。彼らの故郷観は、親戚との付き合いや家族によって多様化する。地域との関係については、既に経済基盤ができていることと、日本社会での職業的制約から、親の職を継ぐことも多かった。済州島とのつながりは、済州島生まれの戦後渡航の若い1世に強く、地域の在日コリアンによる組織の中心は彼らに移行しつつある。

これまでこの地域は、朝鮮半島のなかでの済州島という出身地の特性や、日本のなかの朝鮮人労働者という制約のなかで、ネットワークを生かしたある種の「コミュニティ」を形成しながらも、積極的な自己主張を行なわないことで、地域社会へ「沈潜」する戦略を採ってきたとも言える。現在、地域での新しい活動を文化活動に限定していることにも、そのような地域の歴史との関連が垣間見える。

今後は、世代を経るごとに、故郷とのネットワークも、日暮里・三河島という地域内の結びつきも、その実利的機能を保ち続ける必然性は低下すると思われる。しかし、一方では、社会的制約のためではなく地域の産業基盤を生かした積極的選択としての地域への定着を見ることもできる。また、在日コリアン多住地域としての新たな活動の中心になっていること、ニューカマーズを引き込み教会が次々と建てられているなど、外部との関係性の変化によって新たな「場」としての意味付けが生まれ始めている。